
同じ声のアーティスト

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ声のアーティスト

【Zコード】

N6168A

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

「人気アーティスト誘拐事件」の分岐小説です。出ているキャラに哀が加わっています。。

(前書き)

人気アーティスト誘拐事件の分岐小説。

分岐シリーズ第2弾。

私の名前は灰原哀。

江戸川コナン君の同級生で、少年探偵団の1人。

といつても、小嶋君達になかば強制的に入れられたんだけどね。

缶蹴りをしていた私達は、今大人気のTWO-MIXの1人、高山みなみさんと知り合いになつた。

なりゆきで、私達は彼女に食事をおごつてもらえる事になつたんだけど・・・

元太「パクパク・・・」

歩美「モグモグ・・・」

光彦「ゴクゴク・・・」

小嶋君達は高い物ばかり注文している。

私も工藤君もなかばあきれて、少しば遠慮しろよという顔になつていた。

ちなみに私と工藤君は、メロンソーダしか注文していない。みなみさんの方を見ると、サイフを見てショボクレている。どうやら、あまりお金を持って来なかつたようだ。

私はみなみさんに話しかける。

哀「あの・・・足りないなら、私と江戸川君も少し出しましようか？」

コナン「な、なんでおレまで・・・」

みなみ「あ、いいのよ、私がおごつてるんだし・・・」

哀「でも、この調子だとお金なくなりますよ?」

みなみ「アハハ・・・じゃあ少しだけカンパしてもらおうかなあ？」

そんな中、みなみさんが私達にある悩みを話してきた。

何でも、最近事務所のロッカーが荒らされたり、自宅のマンションのカギ穴にこじ開けようとした跡があつたり、悪質なイタズラ電話までくるらしい。

案の定、小嶋君達が『少年探偵団にお任せを！』などと言い出し、私と工藤君も話を聞く事になった。

イタズラが始まったのは、ラジオの生放送で新曲のデモテープをワンドコーラスだけ流してからだという。

その新曲のデモテープを、私達も聞いてみる事にした。

いい曲だけど、別に妙な声や音は入っていない。

どうやら、イヤガラセの原因はデモテープではないようだ。

そんな中、円谷君がおもしろい事に気がついた。

なんと、工藤君とみなみさんの声がそつくりなのだ。

みなみさんが、カゼを引いた時工藤君に代役を頼もつかなあと書いてきた。

でも、私はすぐに反対した。

哀「ダメよー！だつて江戸川君・・・音痴だもの！」

工藤君は、困った顔をしていた。

でも、しうがないでしょ、工藤君。

この前蘭さんと園子さんに連れられてカラオケに行つた時、あなたかなり音を外して歌つてたんだもん。

私も蘭さんも園子さんも、耳を塞ぐしか手段がなかつたのに。

あの歌声では、お客様を怒らせるのがオチだしね・・・

その後、事件が起きた。

なんと、みなみさんが相棒の椎菜さんと共に、怪しい男達に誘拐されてしまったのだ！！

しばらくして目暮警部達が到着し、犯人から電話がかかってきた。
ところが、犯人達は妙なヤツらだった。

目的はお金ではないと言つのだ。

犯人達はいわゆるストーカーという者達で、彼女達の物なら何でも
欲しいらしい。

たとえば、みなさんが店に置き忘れたバッグとか。
目暮警部は、部下に届けさせると言つたが、犯人達は甘くはなかつ
た。

なんと犯人達は、私達にバッグを持って来させると言つのだ！！
工藤君は、犯人達の要求に応じる発言をし、私達はライブが始まる
までにみなさん達を助けようと決意した。

犯人達の様子から、私と工藤君は、犯人達の狙いが新曲の「デモテー
プだと推理した。

電車に乗り込んだ私達。
工藤君は、デモテープの歌詞を書き出している。さつきから私達は、
山手線をぐるぐる回つているだけ。

普通に考えると、私達をからかっているようにも思える。
しかし、私と工藤君は犯人達の真の狙いがわかつていた。
おそらく犯人達は、私達が警察の視界から消えるチャンスを待つて
いるのだろう。

案の定、次の駅で犯人達がデモテープを渡せと言つてきた。

トイレの中で、私が吉田さんにデモテープを渡し、持つて来させろ

と。

私と工藤君は円谷君から、さらに重要な情報を聞いた。

みなみさん達が新曲を思いついたのは、昇円寺というお寺を通りかかった時だというのだ。

昇円寺といえば、去年の大晦日に正当防衛の殺人事件があつたお寺だ・・・

それによつて、私と工藤君の推理は確実になつた。

工藤君は、私と吉田さんを危険な目にあわせないため、そして犯人達を油断させるために、あえて自分が行くと言い出した。

小嶋君達は賛成し、髪型が似ている吉田さんと工藤君は、トイレに入り着替え始めた。

私はある考えを思いつき、トイレに行くと言つて中に入った。

数分後、犯人達から電話がかかってきた。

犯人達は、作戦が成功したと思っているだろつ。

まさか、工藤君が吉田さんと入れ替わつているとは思つまい。

第1の作戦通り、小嶋君達はドアが閉まる直前に電車に乗り込み、

工藤君はホームで倒れ置き去りにされた。

そして私は、柱の影から工藤君の様子をうかがつてゐる。

第2の作戦で、小嶋君達はバッグを外に投げた。

目暮警部が電話で話しているスキに、工藤君は駆け出した。

私は見失わぬよう、工藤君の後を追つ。

目暮警部と部下の1人はバッグが落ちた場所に向かつた。

2人共、私と工藤君が消えた事には気づいてはいない。

でも、たぶんすぐにわかるだろつ。

工藤君は雨の中を駆け抜けっていた。

私はその後をこつそりとつけていく。

公衆電話のベルが鳴り、工藤君は受話器を取った。

『うん、誰もいないみたい・・・』『うん・・・歩美がんばるー。』
だつて。

演技力抜群ね、工藤君。

私は、クスクスと笑っていた。

工藤君が再び駆け出した。

私はあわてて、彼の後を追っていく。

コナンは再び公衆電話で受話器を取り、犯人の1人と話していた。
コナン「もしもし？」

「約束通り1人で来たようだね、お嬢ちゃん・・・さあ、そこから
見える倉庫の2階にテープを持って来るんだ。大好きなTWO-M
IXが待ってるぜ。」

その後、男はもう1人に電話をかけた。

哀「あ～ん、どうしようつ・・・工藤君を見失つちゃったよお・・・」

そう、私は工藤君を見失つてしまい、しかも道に迷っていた。

哀「どうしたらいいかしら・・・ん？」

私の横を、見覚えのある男が通りすぎた。

哀「（ゆ、誘拐犯の片割れ・・・・！）」

私は、男の後をこつそりとつけていく。

しばらくして男は立ち止まり、電話をかけた。

「私だ。どうだ、そつちの様子は？」

「予定通りだ。あと少しで、お嬢ちゃんがテープを持つて来る・・・

「そうか。しかし万が一の事を考える。誰かとすり替わっている可能性もある。」

「そうだな。どうしたらいい？」

「ドアを開くようにして、ドアの内側で待ち伏せろ。もし、ちがうガキだつたら、捕まえて閉じ込めるんだ。」

「ああ、わかつた。」

男の会話に、私はハッとした。

哀「（ど、どうしよう・・・もし、工藤君が吉田さんとすり替わっているとバレたら・・・！大変だわ！田暮警部に連絡をしなきや・・・）」

ガシツ！

哀「え！？」

気がつくと、私は右腕を男につかまれていた。

哀「あつ・・・・！」

「聞いてたな？今の話・・・ん？お嬢ちゃんは、あの時のガキ連中の1人じゃないか・・・」

哀「あ・・・・あわわ・・・・」

私は会話を聞く事に気を取られ、男に近づきすぎていた。

「フフフ・・・一緒に来るんだ。」

男は、縄を取り出し私の手足を縛り上げると、私を抱き上げた。

哀「キヤアアア！放してよお～・・・

私は男に捕まってしまった。

哀「放して、放してえ～！～」

私はジタバタともがいた。

「黙つてな。」

私は男に口を手で塞がれた。

哀「ん~、ん~・・・モゴモゴ~・・・」

私は何もできず、男に抱えられ、運ばれていった。

一方、何も知らないコナンは、倉庫の2階にたどり着いた。

コナン「持つて来たよ、おじさん！」

コナンは声をかけるが、返事がない。

コナン「どうなつてんだ？ いないのか・・・？ あれ？ 開くぞ・・・」

コナンはドアを開けて中に入った。

コナン「あ、いたいた。もう大丈夫だよ、お2人さ・・・わっ！？」

コナンは突然、男に抱き上げられ、羽交い締めにされた。

コナン「えつ・・・？」

コナンを捕まえた男が、コナンをにらんでいる。

「やはりちがうガキだつたか。ナメた事してくれるじゃないか・・・」

「コナン「う・・・（麻酔銃を・・・）・・・あれ？」

「コナンは麻酔銃を撃とうとしたが、歩美と入れ替わったため、武器はすべて歩美の方に行つていた。

コナン「し、しまつた！ 武器は全部歩美ちゃんが・・・」

「ハハハ、観念するんだな、ボウヤ・・・」

数秒後、コナンは手足を縄で縛られ、床に転がされた。ドサツ！

コナン「あつづ~！」

「クッククック・・・オレ達を甘く見てたな、ボウヤ・・・」

「コナン「う・・・」

「私の言つた通りだつただろ?」

「コナン「・・・」

男の後ろに、もう1人の犯人が立つていた。
しかも、その手に誰か抱えている・・・

「コナン「は、灰原!」

哀が手足を縄で縛られ、男に抱えられている。

哀「うう、江戸川君・・・」

男は、哀をコナンの前に突き飛ばした。

ドン!

ドサツ!

哀「キヤツ!」

「コナン「灰原、オマエ・・・どうして・・・」

哀「ごめんなさい・・・あなたを追いかけて来たんだけど、途中で
見失つちゃつて・・・この人に捕まっちゃつたの・・・」
哀は、コナンの横に行つた。

「ガキが2人そろつてナメた事しやがつて・・・」

「まあ、目当ての物は手に入れたからな・・・」

男は、コナンから奪つたデモテープを取り出した。

「この2人の事だ、コピーも取つてあるんだろうが・・・」

「さて、コイツら、どうしてやろうかね・・・」

「コナン「く、くそつ・・・」

哀「え、江戸川君・・・」

コナンと哀、みなみと椎菜は、絶体絶命の危機にさらされていた・・・

・

その頃、目暮警部達と歩美達は、電車を降りて、線路沿いの道にいた。

目暮「何い！？コナン君と歩美君が入れ替わって、哀君がコナン君の後を追つていった？」

光彦「犯人の真の狙いは、デモテープだつたんですよ！」

元太「そのテープを歩美か灰原に渡して、警察をまけつて犯人が言うからよ・・・」

歩美「コナン君が私と変わつてくれて・・・」

光彦「灰原さんはコナン君の後を追うつて言つたんですよ・・・」

目暮「しかし、なんでワシらにその事を言わなかつたんだね？」

光彦「犯人の作戦が成功したように思わせた方が、犯人が油断するでしょ？」

歩美「だから、それまでこの作戦を氣づかれちゃいけないって・・・」

「

目暮「しかし、これで犯人の居所がつかめなくなつてしまつた・・・入れ替わつたコナン君も、後を追つていつた哀君も危険だ・・・」

歩美「それなら、この追跡メガネを使えばいいよ！」

目暮「そうか。しかし、2人が心配だな・・・」

元太「大丈夫だよ、コナンは武器をたくさん持つて・・・」

歩美「あ・・・キック力増強シユーズ、私がはいてた・・・」

目暮「何！？」

歩美「そういうえば、時計型麻酔銃も私の腕に・・・」

元太「おいおい、じゃあ・・・」

光彦「コナン君は丸腰で、無防備つて事ですか？」

歩美「そ、そうみたい・・・」

目暮「な、なんて事だ・・・」

歩美「目暮警部、急がないと、コナン君達が危ないよ・・・」

目暮「そ、そうだな！」

歩美は追跡メガネのスイッチを入れ、駆け出した。

日暮警部達も、歩美のあとを追つていいく。

歩美「コナン君、灰原さん！待つててね！！」

その頃、倉庫に閉じ込められたコナン達は、命の危険にさらされていた。

「フフフ・・・警察が来る気配は全くないな・・・」

「かわいそなうだが、ここでボウズ達の命は終わりだ。さあ、最後に残したい言葉はあるか？」

「ナン」「ああ、あるよ。アンタ達を監獄へと誘う、鎮魂歌がね・・・

「レクイエムだと？」

哀「カウントダウンの鐘が響くよ・・・心着替えて走り出せと、ホラ今も1つ2つ・・・」

コナン「季節外れの花火のよつこ、どこかで誰かが告げる始まりの音・・・」

「キ、キサマラ・・・」

哀「そう、これはTWO-MIXの新曲の歌詞・・・そしてあなた達がTWO-MIXを誘拐した動機よ・・・」

「ナン」「そうでしょ？宮原悟史さん？」

哀「あなたは去年の大晦日の夜、身元不明の男を昇円寺のそばで殺し、日暮警部に取り調べを受けたんですね？」

「くつ・・・」

椎菜「去年の大晦日・・・昇円寺・・・」

みなみ「それって、私達がその曲を思いついた場所じゃない！」

コナン「あつたんだよ・・・除夜の鐘の響く11寺50分頃・・・」

その寺のそばで殺人事件がね・・・この人の通報で駆けつけた警察は、拳銃を持つたまま死んでいた男の手から硝煙反応が出た事や、断層の空薬夾が一発だった点から、この人の『拳銃を持った変質者に襲われ、もみ合つてゐるうちに銃が爆発した』という証言を信じた・・・この事件は正当防衛だと・・・

哀「だけど、実際はちがつていたのよ・・・その拳銃は、最初からその男を殺すために持つてつた、あなたの拳銃だわ・・・最初の一発で心臓を撃ち抜いたあなたは、再び同じ断層に弾を込め、地面に発射した・・・硝煙反応が残るよう、その男の手に握らせてね・・・」

コナン「辺りには目撃者もおらず、あなたが警察に通報してゐる間に、余分な弾と薬夾をあなたの後ろにいる男が持ち去る事で、万事うまくいくはずだつた・・・」

哀「でもいたのよね・・・その時の音を聞いてた人達が・・・」

みなみ「それが、私達・・・」

コナン「ああ、みなみさん達TWO - MIXの2人だよ・・・『カウントダウンの鐘』は除夜の鐘・・・『2つの花火の音』は2発の銃声・・・そして歌詞の冒頭の『駆け抜けてきた1996』は1996年・・・これにみなみさん達がラジオで言つていた『昇円寺』を加えれば、2つの音がした日時、場所がわかつてしまつてワケだ・・・」

哀「あなた達も聞いたんでしょ? デモテープが流れたそのラジオを・・・だから、みなみさん達を誘拐したのよ・・・警察がこの事に気づく前に、2人をテープごと抹殺するためにね!」

宮原悟史「フ・・・なかなかしこいじやないか・・・その通り・・・私は宮原悟史だよ・・・殺したのは、以前強盗事件を起こした時の仲間だつたヤツだ・・・いきなり戻つてきてサツにバラすと私達を脅したんで、死んでもらつたのさ・・・」

哀「銃殺してそのまま逃げれば、足はつかなかつたんじやないの?」

悟史「しかたないだろ、見られてしまつたんだから・・・寺の和尚

に私の顔を・・・幸い、和尚は耳が遠かつたからそのままにしていたが、まさかあの銃声を聞いて、歌にしてるヤツらがいたとはね・・・

・

そう言つと、宮原は拳銃をコナン達に突きつけた。

悟史「さあ、もう終わりだ・・・」

「そこまでだ！？」

悟史「な、何だ！？」

「いつたい、何だつて・・・」

ガチャ！

ブス！

ドサ。

悟史「お、おい・・・」

ヒュオオオ！

悟史「！」

ドガツ！？

ドツ・・・

コナン「目暮警部！」

哀「みんな・・・！」

麻酔銃を撃つたのは光彦、みなみのバッグを蹴つたのは歩美だった。

目暮「なんとか・・・間に合つたか・・・」

その後、犯人の2人は警察のお縄についた・・・

当然、オレ達少年探偵団は大目玉をくらつたが・・・

高山みなみさんのとりなしもあつてとりあえず無罪放免となり・・・

目暮警部のパトカーで武道館へ直行した・・・

その後、オレ達少年探偵団はTWO-MIXの武道館ライブに乱入し・・・なんとか無事に武道館ライブは終了した・・・

その後・・・

みなみ「はいこれー今日助けてくれたお礼よーお家で練習してねー」

そして翌日・・・

コナン・哀「アイファイルユアラブリフレクション・・・見つめ返す
瞳にいゝ描いてえ遙かなあゝ・・・」
園子「さつきからこの曲ばつか・・・」
蘭「でも全然うまくならないね・・・」
園子「合わせてる哀ちゃんも大変だわ・・・」
コナン・哀「ネバエーンティーングストオリイイ・・・」

(後書き)

どうでしたか？分岐シリーズの第2弾です。
この作品に哀が出ていた事に？の皆さん。

実は青山先生によると、哀は平次が初登場した10巻で初登場させるつもりだったそうです。

なので、それをふまえて今回の作品を書かせていただきました。
感想もぜひくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168a/>

同じ声のアーティスト

2010年12月2日00時57分発行